

令和7年度病害虫発生予報第5号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病 害 虫 名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
普通期水稻	いもち病（穂いもち）	一	並
	紋枯病	並	やや多
	縞葉枯病	並	並
	トビイロウンカ	少	やや少
	コブノメイガ	少	やや少
	穂吸汁性カメムシ類(注意報第1号継続)	並	やや多
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多
いちご (育苗床)	うどんこ病	やや少	やや少
	炭疽病	並	やや多
	ハダニ類	やや少	並
アスパラガス	斑点性病害(褐斑病、斑点病)	やや多	やや多
	アザミウマ類	少	少
かんきつ	かいよう病	やや多	やや多
	黒点病	やや多	やや多
	ミカンハダニ	並	やや多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並
びわ	がんしゅ病	少	少
	灰斑病	並	並
	ナシヒメシンクイ	やや少	並
果樹共通	カメムシ類	やや少	やや少
茶	炭疽病	並	並
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多
	チャノコカクモンハマキ	やや少	並
	チャノホソガ	やや多	やや多
	カンザワハダニ	少	やや少
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多
	クワシロカイガラムシ	少	少

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

普通期水稻

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（66筆）の結果、葉いもちの発病株率は3.7%（2.0%）、発生圃場率は13.6%（24.3%）であった。

イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、葉いもちの発生を認めなかった（発病株率 11.8%）。

2. 紋枯病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(66筆)の結果、発病株率は1.0%(1.0%)、発生圃場率は13.6%(13.8%)であった。

イ 8月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は23.5%(20.8%)であった。

ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(66筆)の結果、発生を認めなかった(発病株率0.0%、発生圃場率0.1%)。

イ 8月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

ウ 8月前期の巡回調査(66筆)の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭(0.1頭)、発生圃場率は34.8%(38.3%)であった。

エ 8月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.2頭(0.2頭)、寄生株率は15.0%(16.0%)であった。

4. トビイロウンカ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(66筆)の結果、株当たり虫数は0.00頭(0.02頭)、発生圃場率は1.5%(13.9%)であった。

イ 8月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、株当たり虫数は0.0頭(0.3頭)、寄生株率は1.0%(17.1%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏りが大きい。このため、圃場の見回りを徹底し、できるだけ圃場全体の発生状況を把握して、防除を行う。出穂期以降の要防除水準は、株当たり雌成虫数が1頭以上である。

イ トビイロウンカに登録のある殺虫剤の多くは卵や成虫への効果は劣ることから、若齢幼虫期に散布する。

ウ 防除実施後もその後の発生状況に十分注意し、防除効果の確認を行うとともに必要に応じて追加防除を行う。

エ 本虫は株元を好んで寄生するので、薬剤散布は株元に薬剤が十分に付着するよう丁寧に行う。

オ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境(ミツバチや水産動植物等)に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

5. コブノメイガ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(66筆)の結果、食害株率は2.6%(6.4%)、発生圃場率は71.2%(46.7%)であり、地域によって発生状況に大きな差があった。

イ 8月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、食害株率は1.2%(17.3%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、圃

場の見回りを徹底する。薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。

6. 穂吸汁性カメムシ類

令和7年7月16日付け**病害虫発生予察注意報第1号**を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況等

ア 7月後期のイネ科雑草におけるすくい取り調査（15地点）の結果、捕虫網による10回すくい取り当たり虫数は15.4頭（8.0頭）と平年より多い発生であった（表）。

イ 8月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査（22地点）の結果、捕虫網による10回すくい取り当たり虫数は6.3頭（8.7頭）と平年並であったが、斑点米形成能力の高いホソハリカメムシが平年より多い発生であった（表）。

ウ 8月前期の早期水稻の巡回調査における水田内すくい取り調査（28筆）の結果、捕虫網による20回すくい取り当たり虫数は1.8頭（0.7頭）、発生圃場率は12.5%（13.2%）であった。

エ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくいとり当たり虫数						発生地点率			
	7月後期			8月前期			7月後期		8月前期	
	R6	平年	R7	R6	平年	R7	平年	R7	平年	R7
ホソハリカメムシ	0.8	1.1	2.5	2.3	1.4	2.7	76.6	93.3	79.8	100
クモヘリカメムシ	0.1	0.4	0.3	0.7	0.6	0.5	39.4	26.7	45.9	22.7
シラホシカメムシ	0.1	0.2	0.6	0.4	0.3	0.3	42.2	66.7	48.0	50
アカスジカスミカメ	4.3	6.4	12.0	3.5	6.4	2.6	82.9	100.0	79.0	81.8
ミナミアオカメムシ	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0.1	4.7	0	3.8	9.1
イネカメムシ	0.0	-	0.1	0.0	-	0.0	-	4.5	-	4.5
計(イネカメを除く)	5.3	8.0	15.4	7.0	8.7	6.3	95.4	100	96.3	100

注) 平年はH27～R6年の最大・最小値を除いた平均値

注) イネカメムシの調査はR6年から開始のため、過去や平年の数値はない

(2) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の飛来・増殖源であるイネ科雑草の除去等、圃場環境整備に努める。
なお、水稻の出穂10日前以降の畦畔等の除草はカメムシ類の圃場内への侵入を助長するので避ける。

イ 防除時期は穂揃い期とその7～10日後の2回が基本である。2回目の防除以降も発生が多い場合は、2回目防除のさらに7～10日後に臨機防除を実施する。

ウ 水田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布を行うと効果が高い。

エ イネカメムシは出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、防除適期は出穂直後とその7～10日後であり、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。

オ 薬剤散布にあたっては、使用時期（収穫前日数）等の農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境（ミツバチや水産動植物等）に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月前期の巡回調査（8筆）の結果、幼虫の寄生株率は2.0%（2.6%）、株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、白変葉発生圃場率は50.0%（47.0%）であった。
- イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は、平年並で推移している（図）。
- ウ 向こう1か月の気温はかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

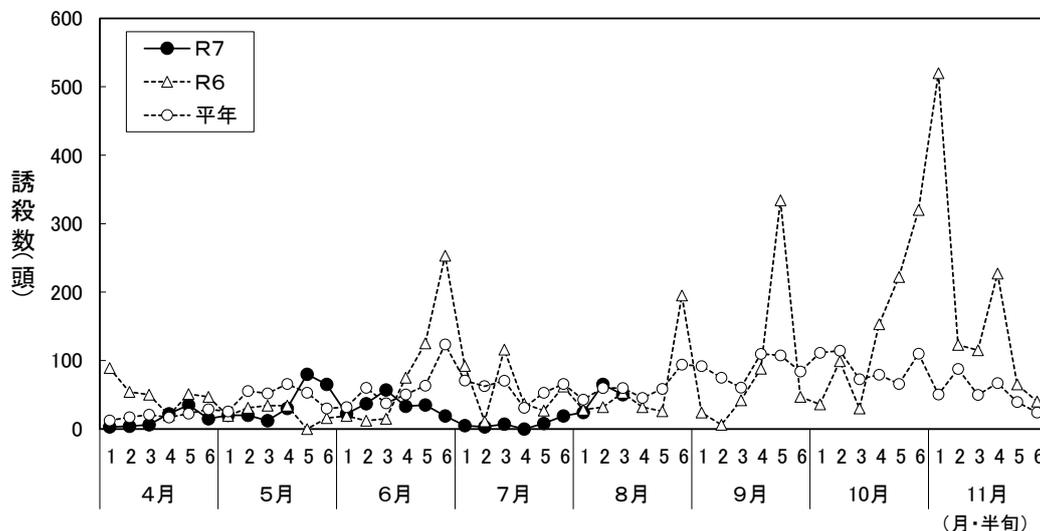


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越町)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。
- イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

いちご（育苗床）

1. うどんこ病

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
8月前期の巡回調査（29筆）の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。
- (3) 防除上注意すべき事項
本病菌の本圃への持ち込みを防ぐため、定植前の薬剤防除を徹底する。特に「恋みのり」は「ゆめのか」に比べて葉で発病しやすいため留意する。

2. 炭疽病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
ア 8月前期の巡回調査（29筆）の結果、発病株率は0.0%（0.2%）、発生圃場率は3.5%（7.8%）であった。
イ 防除員等からの情報によると8月上旬の降雨以降、急激に発生が増加している地区がある。
ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本病の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 圃場の見回りを徹底し、発病株の早期発見に努める。発病した苗やその周辺株は速やかに処分する。除去した株は圃場内やその周辺に放置しない。
イ 新葉の展葉間隔に合わせて定期的に薬剤防除する。特に激しい雨や台風の前や下葉除去など株に傷が付くような作業後は重点的に行う。
ウ 薬剤散布後に降雨が予想される場合は、固着性の展着剤を加用すると防除効果

- が安定する。
 エ 株冷入庫前、定植前は苗の選別を徹底する。

3. ハダニ類

- (1) 予報内容：発生程度 並
 (2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(29筆)の結果、寄生株率は3.9%(15.2%)、発生圃場率は51.7%(56.9%)であった。
 イ 向こう1か月の気温はかなり高く、降水量は少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

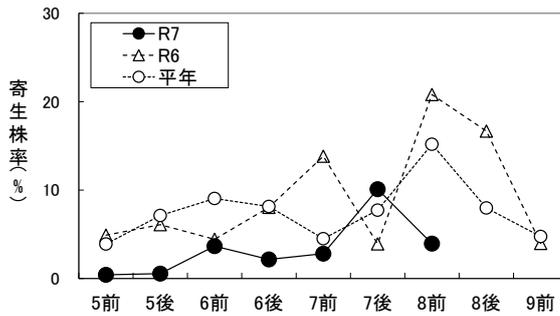


図 ハダニ類 寄生株率の推移(育苗圃)

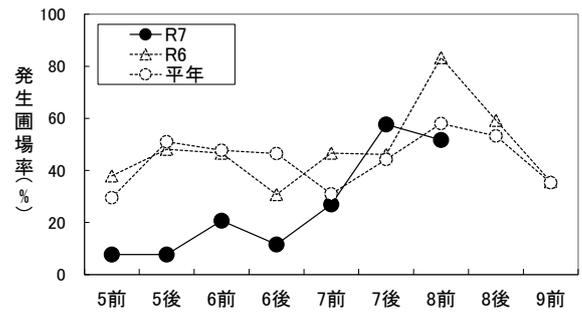


図 ハダニ類 発生圃場率の推移(育苗圃)

- (3) 防除上注意すべき事項

ア 本圃で多発すると防除が困難になるため、本圃へ持ち込まないよう定植前の防除を徹底する。株冷処理を行う場合は、入庫前の薬剤防除を徹底する。
 イ 下葉の裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
 ウ 古葉を摘葉後に防除すると効果的である。摘葉した葉を圃場内に放置すると周辺株へハダニが移動するため、速やかに圃場外に持ち出し密閉処分する。
 エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和7年長崎県病害虫防除基準 P182~183の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤を連用しない。薬剤は感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤を積極的に活用するが、卵に対する効果が低いので5~7日おきに連続散布を行なう。
 オ 天敵による防除を予定している場合は、薬剤によっては天敵に長期間影響を与えるものがあるので、薬剤の選択と使用時期に注意する。

アスパラガス

1. 斑点性病害(褐斑病、斑点病)

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
 (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発病側枝率は11.7%(3.1%)、発生圃場率は60.0%(41.4%)であり、一部多発圃場が見られた。

- (3) 防除上注意すべき事項

ア 茎葉が過半繁にならないようにして、株内の通風性をよくする。また、妻面を開放するなどハウス内の湿度低減を図る。
 イ 発生初期からの防除に努める。降雨後に多発しやすいので降雨が続く場合は散布回数、間隔を考慮する。

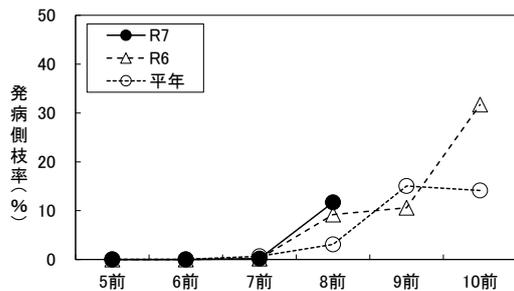


図 斑点性病害 発病側枝率の推移

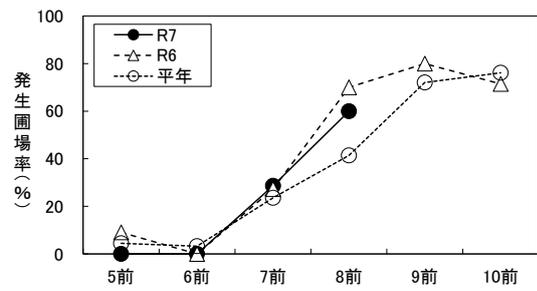


図 斑点性病害 発生圃場率の推移

2. アザミウマ類

- (1) 予報内容：発生程度 少
- (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（10筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所）は2.9頭（9.5頭）、発生圃場率は20.0%（62.9%）であった。

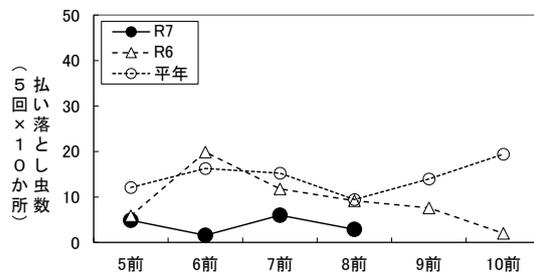


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

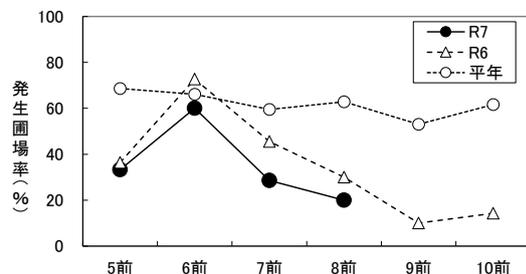


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移

かんきつ

1. かいよう病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（36筆）の結果、発病葉率は0.8%（0.3%）、発生圃場率は27.8%（20.1%）、発病果率は1.4%（0.1%）、果実での発生圃場率は22.2%（8.0%）であり、一部多発圃場が見られた。

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の抑制には、予防的な薬剤散布が効果的である。強風を伴う雨が予想される場合には事前に銅水和剤の散布を行う。
- イ 銅剤は高温期に散布すると薬害を生じることがあるため注意する。また、薬害防止のため農薬のラベルに従い、炭酸カルシウム水和剤（クレフノン等）を混用する。
- ウ 感染源を減らすため、発病枝や発病果は除去し、圃場外に持ち出し処分する。

2. 黒点病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（36筆）の結果、発病果率は7.6%（3.3%）、発生圃場率は44.4%（18.1%）であり、一部多発圃場が見られた。

- (3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後の気象（降雨）の推移に留意し、防除適期を逸しないよう努める。

※累積降水量による防除間隔の目安は250～300mmである。また、降水量が目安に満たない場合でも、前回散布からの経過日数を目安（25～30日後）に防除を行う。（マンゼブ剤の場合、令和7年長崎県病害虫防除基準参照）。

- イ 臨機防除で薬剤を追加散布する場合は、各薬剤の使用回数に注意する。
- ウ 枯れ枝が伝染源となるので、管理作業と併せて剪除する。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ア 8月前期の巡回調査（36筆）の結果、寄生葉率は11.7%（7.1%）、発生圃場率は50.0%（35.4%）であった。
 - イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高く、降水量は少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 盛夏期を過ぎて気温が低下してくると発生が増加するので、発生初期に防除する。
 - イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病害虫防除基準P318～320およびP324～326の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。
 - ウ 薬剤感受性が低下している場合があるので、効果の高い薬剤を選定する。具体的データについては、病害虫防除所ホームページのかんきつのかんきつのミカンハダニ薬剤感受性検定結果を参照する。

4. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
 - ア 8月前期の巡回調査（36筆）の結果、果梗部の被害果率は0.1%（0.8%）、発生圃場率は8.3%（18.1%）であった。果頂部の被害果率は0.0%（0.1%）、発生圃場率は11.1%（3.8%）であった。
 - イ 黄色粘着トラップ（諫早市）において、8月以降の誘殺量は平年並～やや少ない。
 - ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高く、降水量は少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

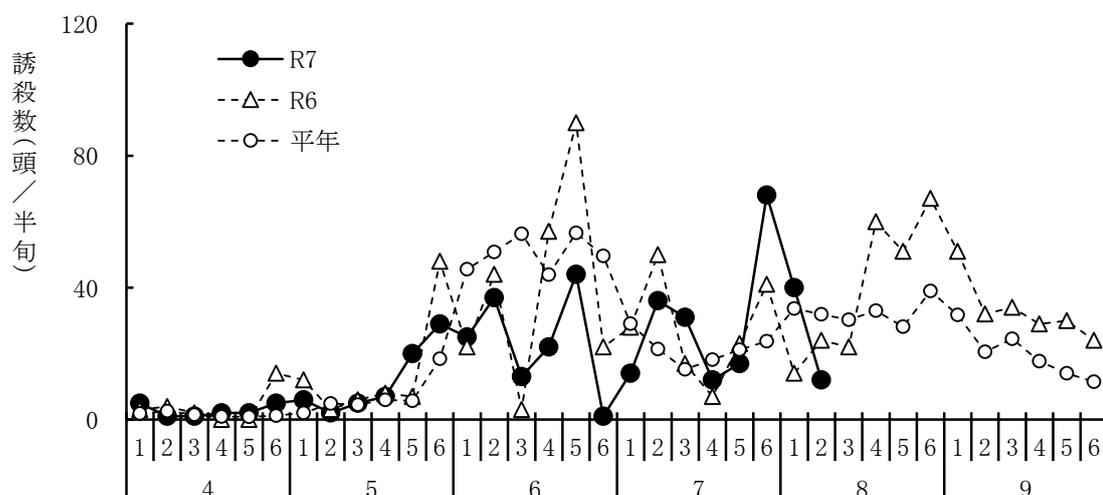


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況 (諫早市小船越町:黄色粘着トラップ) (月・半旬)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日
(令和7年8月18日時点)

地点	長崎	佐世保	口之津	平戸
第6世代	8/10	8/10	8/17	8/27
〃 (平年)	8/20	8/21	8/21	9/6
〃 (前年)	8/10	8/11	8/12	8/24
第7世代	8/28	8/28	9/3	9/16
〃 (平年)	9/6	9/8	9/7	9/28
〃 (前年)	8/25	8/26	8/28	9/11
第8世代	9/15	9/16	9/22	10/12
〃 (平年)	9/26	9/29	9/28	10/30
〃 (前年)	9/11	9/11	9/15	9/28

注1:発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。

なお、積算には令和7年8月17日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2:同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。

また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3:表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が

高い。なお、発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(発病枝葉率0.3%、発生圃場率13.8%)。

2. 灰斑病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は13.2%(16.8%)、発生圃場率は100%(92.5%)であった。

3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.5%)。

イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は平年並~やや少ない(凶)。

ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高く、降水量は少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

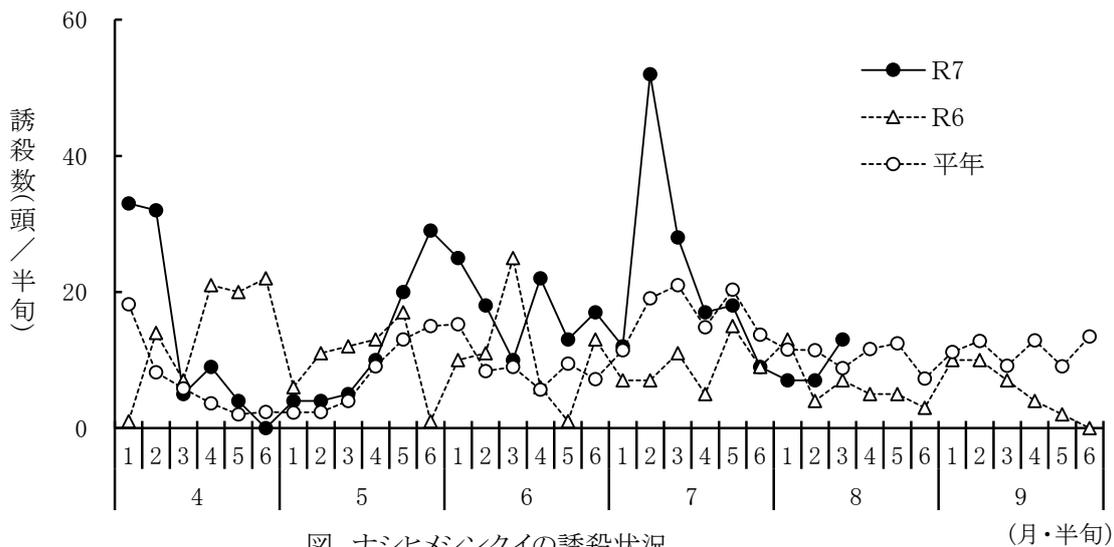


図 ナシヒメシクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ（諫早市、西海市、南島原市）の誘殺量は、平年並～少なくて推移している（図）。

イ 予察灯（諫早市、南島原市、五島市）の誘殺量は、平年並～やや少なくて推移している（図）。

ウ 7月下旬に実施したヒノキきゅう果のビーティング調査の結果、1枝当たりの寄生虫数は0.5頭（平年 1.6頭）と平年よりやや少なく、県内15地点のヒノキきゅう果の平均着生程度指数は3.4（平年 2.7）と平年よりやや多かった。口針鞘数調査によるヒノキからの離脱時期は、平年より遅いと考えられるが、きゅう果の着生程度が低い地域では、やや早くなる場合も考えられる（令和7年8月1日付け**病害虫発生予察技術情報第2号**参照）。

エ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みである。高温・乾燥が続く場合、ヒノキきゅう果の劣化が急速に進み、ヒノキからの離脱が早まる場合がある。

(3) 防除上注意すべき事項

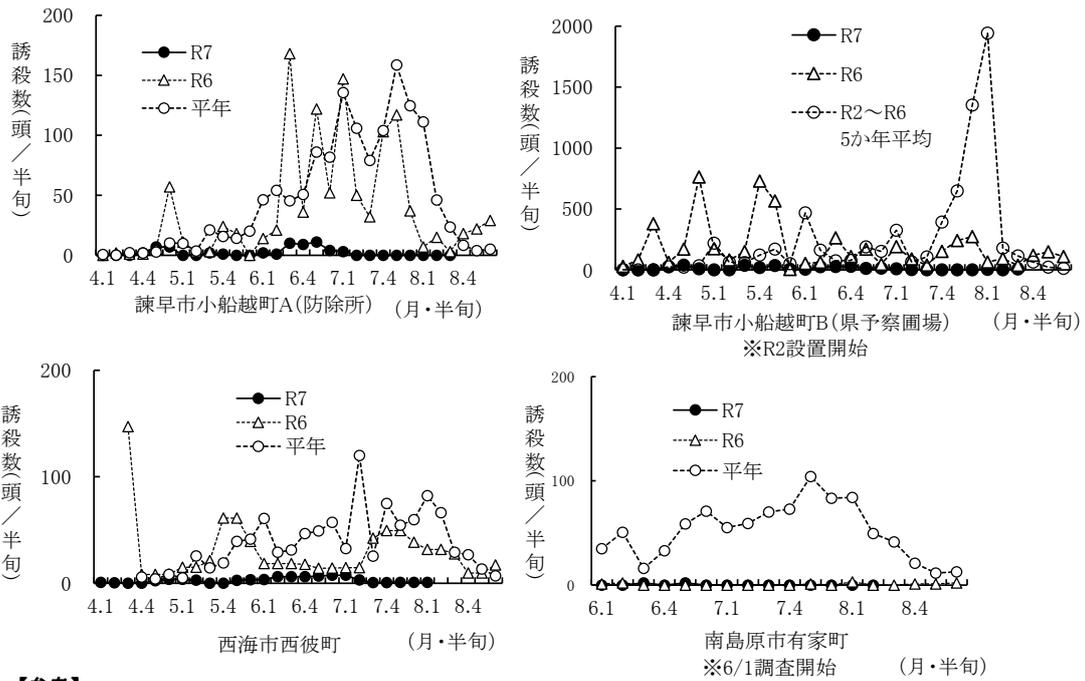
ア 飛来時期や飛来数は園によって差があるので、こまめに見回って早期発見に努め、飛来を認めたら早急に防除する。山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいため注意する。

イ ハウス栽培では、開口部を防虫網（4mm目以下）で被覆し、侵入を防ぐ。また既に被覆済みのハウスでは、防虫網の破損がないか点検・補修する。

ウ カメムシ類の活動は日没前後から活発になるため、薬剤散布は夕方あるいは早朝に行うのが効果的である。

エ 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとミカンハダニが急増することがあるので注意する。

オ 特に収穫時期の近い品目は、薬剤散布時期に注意し使用基準を遵守する。また、周辺環境を十分に確認し、ミツバチを含め周辺動植物等への飛散等の影響がないよう十分注意する。



【参考】

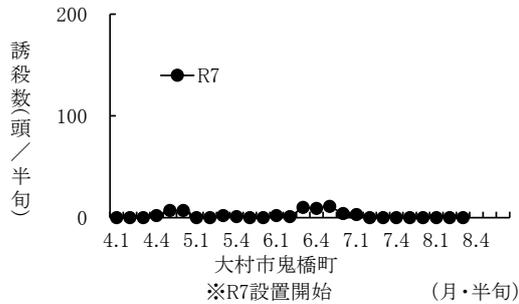


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

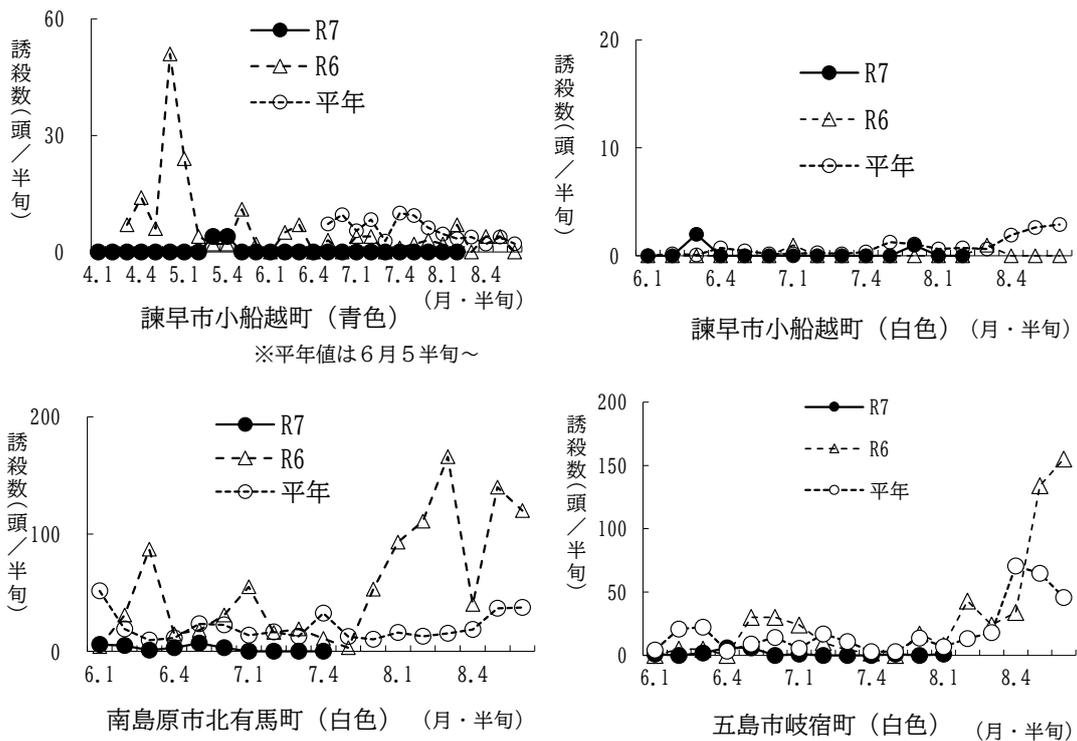


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ誘殺状況(予察灯:白色、青色)

茶

1. 炭疽病

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり発病葉数は2.1枚（2.9枚）、発生圃場率は50.0%（59.5%）であった。

2. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は34.5頭（32.3頭）、発生圃場率は83.3%（93.4%）であった。

イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

- (3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病虫害防除基準 P349～350の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

3. チャノココクモンハマキ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.2枚（0.5枚）、発生圃場率は8.3%（16.5%）であった。

イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数はやや多く推移している（図）。

ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

- (3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病虫害防除基準 P349～350の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

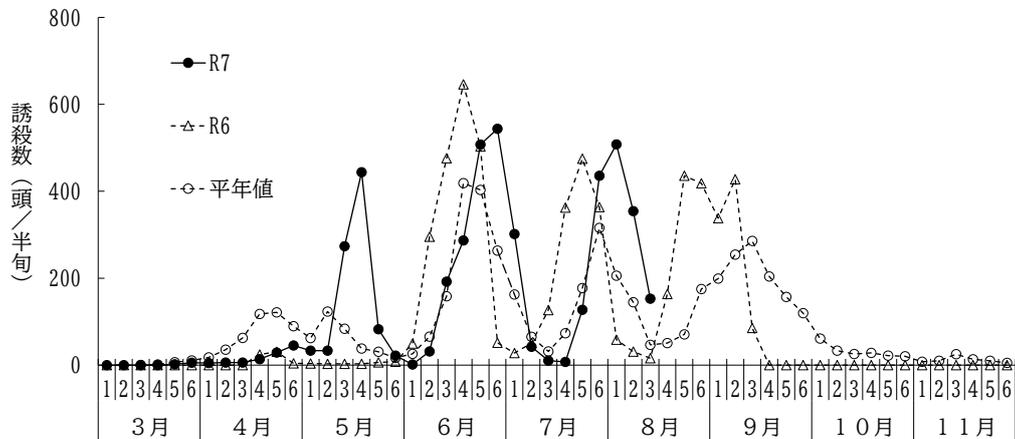


図 チャノココクモンハマキの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ） ※茶業研究室調べ (月・半旬)

4. チャノホソガ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は1.4枚（0.5枚）、発生圃場率は25.0%（4.5%）であった。

イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は、やや少なく推移している（図）。

ウ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

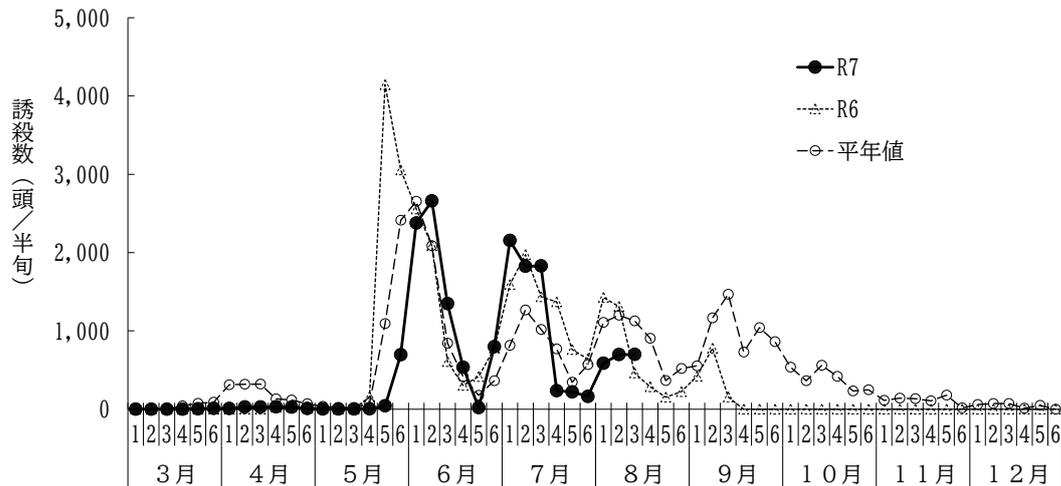


図 チャノホソガの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ）（月・半旬）
※茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病虫害防除基準P349～350の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率0.7%、発生圃場率16.3%）。

イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は3.7頭（2.9頭）、発生圃場率は58.3%（56.9%）であった。

イ 向こう1か月の気温は平年よりかなり高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和7年長崎県病虫害防除基準P349～350の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（寄生株率3.3%、発生圃場率24.0%）。

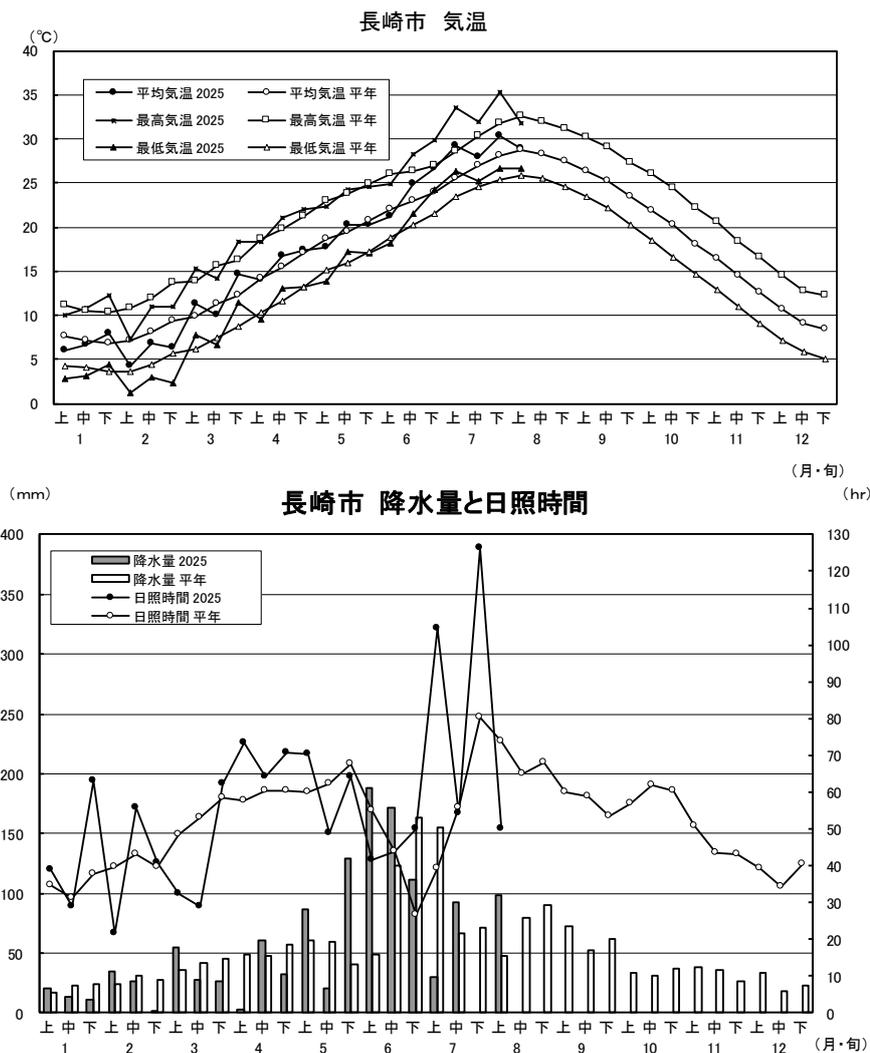
【参考】

(令和7年8月14日発表 1か月予報 福岡管区気象台)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	10	80
降水量	50	30	20
日照時間	10	30	60

※予報対象地域：九州北部地域

令和7年の気象経過(長崎地方気象台)



- 6月から8月までの3か月間を「農薬危害防止運動月間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。
- 長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室 (長崎県病害虫防除所) ホームページ」アドレス

: <https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/JPP/index.html>

- この情報に関するお問い合わせ
長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) TEL : 0957-26-0027

